1450
4

遠
1450
4

寒温奇談一二艸

方忠

寒温奇談一二艸 巻之四

四 游女が妖術千人の貴を娶一人に擲つ話

應仁の末天下大に乱れ朝廷もこれより衰く。武將といふ〻捉く。帝都は汗血馬蹄の塵に汚されて。宮殿細川が合戦日夜やむ時なく。しかも五畿七道も擾乱の揆危を踏の始をとゝ藏人なり。紀姫代まで助春侯あるゝものあり。世い常沿孔の文をよかゝらぬ世の中。いつ沿果るも見へぬ命を保ちゝ革命の時を待のみ色年いまゞ弱冠にして。忽ち任を投し。京の雑を遁江を渡て江州に入るゝ。宮も遠国の兵火に罹く。村民こゝかゝとに別生を失ひ。村落空しくして只芝草となりゝゝ。美濃近江両国の比境に。稀に残る家屋の墻壁すれ軒傾くゝ。荒涼たるあり。その

而小冷しく侘しかりしと。土俗の淳朴し侍りし。去れども漁夫の子となりて
まもなく嵐業の孫を拝ひて。こゝふ独身を崎て一年を送りぬ。えう溫
柔寡欲の生質人の思猜よく。漁人文字を識て次業て迫村乃歩く。
婦次小粧を立て立て甲斐なき身となりて。宣ハ傭主に耕し雲ハ
舊門の小出書を漕ものこへ。嬋年そして烏ぶ。苔てその出産
の濃よ漁夫。寡婦と呼ばいつの程のうち棲とびて。宣ハ業探よ
出く。髪を洗ひ和ハ織指夜のちづまあり。生涯乃扉明暮よ。
額を巻て立てよんてうるのいみきまに。ハのおいとび。乃ハ弱を乃ぶ。歌嘆
乃乳母のこ婉しとこの。女いうも粉ある様ある。ひしとこの和年。秋
を中天よりうる。三蔵の唐の教をあるを思る月よ。変化宇宙の下
よ倣てうるうよ書を演しうるに。何とあく公いさして。仏義流る

ぐう。一題乃月光を国を照し。嬋娟弾ぢうよ吟じてあるの秋を
彼おいうよかうう。小夜の表外しの彼漁夫の女。懐ちうく片ち岩て番を
焚常ある嘯じて。琴笛をあん弾を。楽ハ相手琴を奏し。常く吟清
亮う。外清交和節よ随て耳毋のづう傾さ。心動きこれも清みうて。
其恵吉の。ぢうや。遥かうやに。ぢうく。雖りまく。君ハ。
おうあう。鄭声の雅楽をうぐうる。我学文の清まんるを思べと。雲
を愛。伯畢て又勤学乃庚よ。宇ーうう。夜暴よ雷雨恢ーく。震ひ雨
盆を傾ぐう。風ぢうぐ。列ーく吹すぢ。おとをとうちよ。佛変壊
清を女編へく。ことを元をぐよ。主庭
なれど。負根ハ風よ。ぢうて。まく。面一通り。ぢう。多附ぢうぐ。
面止ハ雲。冥事。一海の月。月を光り。考よ

倍して度出せるぐらい。其眼ちゞめく女たちなどよ。東くらう駕も濡れ。
袖も濡るゝあらなまて。ひしへるさうなる面のえへられいとゞ羞らるゝ
家とひてゝおりてゝ向うの家。着間くに家つき。男の名帝を繼へども。
其容儀田舎の俗なれ。お女はあらば。其眼眼を寄て靜まるまるとく去
るべしといふ女これを聞てさう俯き涙をたらくと流しゐるが。中あり妻
ぐ今貞操のうへ死命を救ひあらば。仏のごとくかくまう。情なく不仁なるや。
其眼前男女宇よりあらざれば。交を拒ゝ。今娘初く我も初。
おゝも眠さ物あり。あの眼人の涙を拭べ。女去妻も一度君不見へ
ちりて。傍なの駅らを通ゞとやとぞひゝくども。そうの様ゝ物ゝ
あゝ。宿夜一味の書を懷の人命の清雅なるよ。男者人の涵ゆ
あゝと。使ゝ分ひたるの。月をる義。輪者の君相具し。梅の蕊を

掛ゝ人しなさゝと。恨る同情ゝ書まよ強く結まびは。人の血を吸く
引せて妖ゝ。衣服敬されども。強く共よ弱ゝ。公乃狂いゝ
いしく。拙さ調ゝ妻ゝ四帝の拒操をのべ。君後嗣ゝ妻の
ゝとなりゝ。此年いでゝ。立足を受てゝ。清ゝ。
婦の利は御ゝ面むべしとそと婦人まを長いゝ十といふこゝを涙て
答ゝ。我今年十六女ゝ二十ゝ。ゝ男ゝ嫁せば男ゝ二十ゝ。ゝ
娶らざるいゝの礼ゝ。是ゝ。七年ゝ男女席を同じゝ
せざるは男人禁を設く。女去君却て我邦の俗を知ゝ。
ずゝ。笑来ゝ。それ今ゝ男年十八。女十二ゝ。嫁娶を聽せと
あり。其眼一時ゝ。ゝ出ぞ。婦人ゝ迫ゝ。ゝ
ゝ我ゝ家ゝの武士父ゝ職系の家ゝ。ゝ。ゝ。

況又云蜂の巣ふにまぢまべ名をさへも防ぎとて我くあるる。人の巣を
潰中の姫を盗へく。自ら働かまるさるさ尾竜の河内へ入ぬ。我い
んぞ。松通乃神を祀て人中。ふ手の色を起し。世間しそもいとど。
又祈るべしそもいとど安眼を結へく。又再び問ばど良久しく五に相
をといたばりしが。女を況を保月ふんやりて君女をそんるる中を厳
はぞ祈しめるへぞも。徹しく足を従へん陰陽ハ和せ生ぶの乃ゑれば
男よハ女ゑんべみ乃ゑるべ。女よハ男ゑんべみ乃ゑるべ。ま天地の
理を推ときハ天地和合し。陰陽交ホして万物生ぜ。天ハ陽り
ゑく父なり。地ハ陰へく母なり。父母お交てる原生ぜ交らさる
ときハ天地よ遠て人嗣を失ぜん陰陽和せされば去ありて秋気
ぐどく。みくありて夏なきがごとし。周く足を和して足を聖度と云

男女相交らざる時ハ陰乃和せぢ陰陽和せげる時ハ天地の乃ゑるべ
天地乃乃立ざる時ハまく一人の乃も立ゑるべ人の乃立さる時ハ
一切の貪欲煩悩を。まで皆実ホるべ。足人ハ万物の長る
まべ。今の人録寡なる時ハ宝動く宝動く時ハ神労る。神
労る時ハ病を換ぜ。又寡居し。弱ぶ麻して。ゑるハざれば陰陽乗の
乗ひ乱ち家ぐ乱熟して金ぐ癒ホ動ぜ。久しき河ハ労しゑる
といふ。夫天ホ川ぐ地ゑくんべみ乃ゑるべ。男ありて女ゑくんべ有ゑる
陰ゑるゑ男子ハ三十にして嫁し。女ゑハ二十ふして嫁ぐ。陰陽乃
りゑ[illegible]ゑるといふ。院ゑ孔ゑ大聖人ぐふと。十有九歳ホして触竜く
を生とあまへハ我遮く。男子ハ二十女ゑハ二十。古聖の法ありといふ
乃ゑ乱ゑ。ゑのらべ。極ゑ生ゑも中古ゑ。ゑ古ゑ次来周俗日ゑ引く資禀

日よ傍に。然るに男子共乃為ほ不扱為て見類を粧ひ時乃厚薄身の分際
古人今齟齬せり。偏に豆仂有海なるべし。二老にむかひて明るあり。只だ二
を言んして節よ足を拭さび。二子ほ妨るあり。庵にたるや。弱年の者
偏乳涌ときを保くりそぎる者、滋熟乃毒こりて悪瘡を生ずる
変我これを知まり。淫欲ゆうき者乃反ハ且く是。我母の柳下恵女を
情に抱く。公に女なれば。母も公に柳下恵女を
相如文君を抱て逃げり。こで楽国よ履をあるこの毀あり。也くあの
公に不潔乃行ひなるべ。天乃照覧あるべ。君今すこし
志をるあ。ぞ。雄兵涙ぞ如く涙れ。芸妓顔を
頻よ解く。母を立礼をあ。兵ばりき。婦人ようれる見識
あるべ。婦人文よ通ぞ巧くるる足。花乃嫁あるべんと。世乃並くよ

為して初ほに礼をなせり。変もなき者ある。平生公屈。精を
と厚る使命ぞよ我年の熱を無ぶ塩ぶして。粗子号ぶとろを
試る経史よ通ぞ国書よ学ぶ。法令線行よ級て。云約小平流紀ぶ
国乃使芸妓徒を掠ぶ。家よ言文あると称ぶ。ぶよ宮を汚ぶ。足身
乃物を忘ぶ。変妓三ぶ。妓ハ女と数ひぬ。芸妓婦ぶ。ぶて千春山
羽年ぶ。ぶ年の情よ為るを思ぶ。是より眉ひ。ぶ。伝ぶ公
ぶ。変に顔あり。二人相恋を和ぶ合ひ。我ハ席を同ぶし。
枕を無ぶ。ぶ年家て寝に就。変ぶ。情の只ハ宮ぶ毀ぶ
乃。位ぶ。の記伝も。隙の竹枯ぶ。芸の笑いぶ。芸笑枯ぶ。
枯ぶもなれぶ。果て邸人女の男む不国ぶ。就むを拾月ぶ賢人
笑ぶ。ぶ。ぶ。

拾ひ庭に生ずる草を採て。羹やうれ物とす。後ろ肌を焼ろ[illegible]
秋乃夜の文案写りて。[illegible]を吹て。[illegible]
ひよわ。萩高八行。簀を敷て生盤ろ。渡の流を[illegible]
様のやうに。哀しく流るゆう。朝夕よかくあひろまてく。伝ある恋ろ
恋を辱とし。日に夜に形の悴のよをん。[illegible]
天や望あり。我懸ろあり。[illegible]と色と相ひく。[illegible]村よ行ん
[illegible]ハ情[illegible]。[illegible]。[illegible]天下の[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。

無上維摩の帯を結ぶ千人義のごとくに露されて月の雲の一夜の宿よりふるを手を家を手すまたた霧雨に去るまを夏風を去のぎて通ひ来るうれへ計撰乃袿狩乃袿ひつく病ひ苦し秋とて公子。物のかさ多くなすべし。渇水干ふさとの稽きく。君が許よりを池ふ江に神嶋鑿の風あり。坂上の人の猛会桜の花法むすびさげ。花田の土地の袿さらて獨よまき月。編笠の浦くゆし。出貫の公見とし人へたやと。打ちあり来る。数ハまくと失あり。或ハ月。或ハ花。或ハ悲或ハ荘ひ。これを共よまあり。通ひそめる。後朝ふど。袖乃うつ煙よ。侍ハ打つきをひとやのうあり。公まるひよ。世乃鶏。人のいひうまるを。公の知ありて。この書ようあずと。手る酒盃のこと。公のうちよりん桜の数うまれる程。云の坊ふとん。孟嘉の仇あるりのこうぐハ。又ハ嘉可乃

云の坊ふ仁。信とう弟こうもうまを。寛大のうるみ。浦武始て紫数を品の製度これを始されく。狩ちあり。の赤よ。分を鶏。鍵い。春ふを陽ふ妃ふ乃。奥ハ。むこうう。浮を女ハ。怪舞ふて。彩ふ。べ。茶のど。乃ハ。た。神君の婦ふて。おすハ。次ふ。君よ。嫁よ。。。遊君乃。彩そつ。ふ。枝打く。打く。章葉乃柳。け。母ふ。ハ。ふ。ハ。ざ。ん。母。め。。。る。墻の外へ。那ふ。辺を。。。。。同。桃。。。公。打く。そ。ふ。の。も。よ。白。葉。す。ふ。。。年。の。芝。よ。芝。乃。ハ。芝。乃。稽。乃。花。数。。。の。。。辺。ふ。番。を。ふ。ひ。。。ふ。。。ふ。れ。ど。。。星。よ。斡。ふ。。。。。

よいつぐばせ八物あせぬ。世のが物好のよ盛精乃付八金玉の瓶をうけ
寄り。風勢強まるく吹たり。いかるか如所東夜ありことしまる
斯やハ有ぎ。吾嬬を祝くく執衣押て人眠るこそ云ひ事乃。こうい
くと海内の男よ。我掖中よ有りこそいて。男ハ病と称して我原
元そこの。青遊おこも寄集く。男の上ある人の逢ハ寒彼ハ落みど
寄ゆくよ。吾嬬仲よ黒白せさしてさとけ。むれくと小袋をうす
まく故乃駅屋来ら男のとつ寝坊にくよ。指東ていきまと進れば。
吾嬬笑ふく。夫人おんそ寝形金寄月ハ帳ありくと事とせん。和男さ
ちハ巧よ男ふものこよきなくし。激眺流賜て情を捲る依分結んに
頭し。今山厳後面我けきよ楽れく来る涙あり。足赤縄の激法
のことひすて。小袖乃後ハ、まよ文ありを復く。ぬま髪のり来みりく

かくまくを袖のもて樽きめる空ぐれの焼匂ふだるを持て門前よ
いでむる客人ぬ足漢の妻夫人の病よ治ら鍼ありぬ一ハ逢風気
の復人の義平夫度刻どく。旅舘の雨よ通ひる事数月。そ見えまれす
ある。一八再入のあるすると。こん麻費極て豪奢侯谷くて様ハ上れハ
為陽を足く鰭を絆して野毋楽藉者さりく笑を復せどと吾嬬強よ
傍く踊て事始て。笑を果ゆるるれハ。度刻毋夏の乳を吸をあく
ハ。度人宝り房に就くも吾嬬牧乎を背ゆくとのいるねいくくこの乃
こくかるく面を来げて抱くいふとこ川ぐと云紫いぐ。度刻まる。毋涙が
刻の長稼云いく。一聯乃句をなしてきこと。

月中仙子花中王
第一端娥第一香

吾嬬こくのぎて咲を衝。沐翠乃経冊よ能書の墨ゞ病ゆをあくぐ。

是者よさく料理の乃蓋よのせく丹く

後よこひいるゆ　様元うつろふ及れかひくうまゆまば

廣烈くうこて吟りて有程う何を夜をよく右ろぐものべうる我瞳をぬし

さんと論後へ又身を賜て邪を。吾嬉ゆりは国今恥仁より物よ拵く是をよ

き別をの邪と類らくへ扨ゆもくん殿をて我ゆよりて紙身をまうすうこと

こひは身の人の国をゆや先で。君今くるゆ門くこひ別べ死をもも先を

きんやと廣烈う体よ蕨り。贅の毛ちくくと浅ゆ庫ーう手濃舞。

左ゆへ体媚幼よ世乃ゆ人こひゆへ恥の伝を視をく。かくいへくく抗云

書の是いすぐ乾ぐうよ。踵を旋ぐ盟よ叡くへ娼妓の是仮初のてこを

うれいをだとうよ。君頂三面の人のとく。さぐう我をうぐひゆう。表裏

本心をんせゆさんと。吾妻粗然ちて。上限の雲ようゆう大悩をき

いの事殿中ようう廻て出すそのの人兵垢てをちろく痩羸うるが山殿

こて。吾嬉が七日毎の私夫元姫侍夫助春悦といふ粧君ゆういくゆや

殿ろうへ節を表ゆよ抗し。年月人貝を忍びて横来扨の永頃月

醫家の物ようこ病ゆ人の実者きこゆの人愛ゆ殿の実

を賣ようよ共し足尾庶こへあしづゆよ今日ようハ行義君い身を仕を

ゆゆまび殿こゆよ立く逆ゆし。中紀ゆもようんゆまびいゆうこうの

とを去ぶ。こひぞいゆる君と我。その狎をあの抗云の夜浜史を振ゆ。

湯を探ようゆも。我ゆ一清の寝ゆとうゆられ。君これを流ゆま

ひして。ひよとはもゆるゆなられを海ようあゆひ紀情久ゆと

刀を縛と身体をへへく授ゆ事抗これをうまうして兵形面ゆ濃て

一体の冷汗を深し。羅を脱て横姫狗ようせゆう。吾嬉ゆ面をうん廣烈

が侍よそひよの。類を入れ生まひ中をうまく乳あり。清らしくべ
を門の坡僕搖ゑ杖よと問くちゝ山房よ倫漢を住くまさてをそ
悪朝度を質くゝ債の利よ今ゆこのふもとうくよと。桶のあを酒
て春花を門立門の外へ追出りぬ。春花忘れよ。吾婦が我ゆよ外をうて
より年月の知ぬ。ゝ伝ひるに。今日廣然が家中に
なりんでゆれは暴し振舞ハりと一時の最あり。廣然吾婦ゆ
ひよあくさん拘よあゝにとおわも。是 扨の主を逢るゆゝんとよ
く狐報多激して離のうみ外を思ひて内の中を何時廣然
が声ゆゝこよ。やゝまて留連せん。遊て出の暮にとと。女ゆ抱
あゝられべ。吾煙草を揉よ茶く潤よりて雨ようゝひらが花
き酒よ好すきくゝ入りと。粧をさゝ扨ひて妻戸よ立をひ

風を主ゆうゝ。白さ絵あゝ。廣文ゆくゝ。お解のひゝ
ゆとき見天りのゝ人ゆが侍なき面の恨ゝて。主花ひ時力を
門をばあゝ。女婦ゆ外ゝとゝ。行ゝゝん口弱ゝうむきゆ女性よ
月白を月白ゝ。ゆゆ月を主やゝ夜へ傳ゆん月の神ゝさよと云ひ
ゝて戸を門立義春花力を立ゝよ納め。ゆひ女すゆ。吾婦ゆこれ
茶食の猫の蘇ゆお事の價を入ゝを。ゆんのこれを傍む事ゆん中武
義の月世乃人ゆ茶く強若の名ゆあり。行く占をゝくゝあ。五日婦ゆん年
の虚実を減ん。略法ゝを再び。茶ゝ志を変ゝて。ゆ縁を安ゝび。
里の夜中と更ゆ。このゝ乃姫地ゆて。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ
的ゝ。ゆゆけき聖法を切ゝ。麻の林の中に一個乃茶屋あり春
花ゆゆゝゝ編戸を推ゝ内ゝ入ゝれゝ。時今寅の天乃人

極上にあつて。勤功のおろそかなるが。後生恐るべし。春庭吾輕が姪よ
り今月に到ること。聞よ仏りて。実名を名のらんが為なりと。ふ。ふ。の
ものなれども。道人所伝一保にして。却て云輕しむべし。今日年齢十九
北とう。西の人。来りて。むかしの例。実あるを名者とりしむ。
これまで吾輕が信仰を奪うべし。数百人。逐よりの伝授あるを知べ姫
てその人。実情の報をいろう。今まで吾よが占トのうるはしき貳
あるよあだ。中〳〵二人海濱より無なそ。偶をひるの張り。吾よ懐中に
女の板ら。城あるん。壬辰の日それを印きうべし。こ。出。二人の情人
名嬢が弟。反復のうち。あ。ひ。ふ。ろ。ひ。ず。べ。に。眉を顰く。
中あつて乃人。又一姫の香を牲し。器〳〵宝珠を把出し。春庭を前よ
すむ。春庭仏の宝もあく。続よむ。人。孫燈鏡と洞徹。呉特呉の

鬼教十ととあく。集りあるが形徒面よ点りれべ。はいよ。やと。徳を
消て。驚いて伏せ乃人。歎て云。これ。いよの形神ある。毒性。稀ある。感じ。
五穀に陪しまう人の姫。人を進しむ。吾よ今八万の毛れ孔むかく。
弱き。疾これ。り生で。妖藻陸なり。治療の法。きかく。強て七日
あすり。養よとぐ。八毒の赤丸。を服ち。めて。その病いあ。たいる。春庭
は程。ぶ。り。た。吾輕を。為〳〵。平。て。救眠。るのあ。ら。ば。下。月。の。ろ。あ。ま。べ。又。そ
手。べ。て。く。再。三。附。て。出。り。て。人。唯。〳〵。の。こ。答。く。生。あ。却。説。里。ま。ハ
法。良。法。精。て。吾輕。を。了。藤。よ。ろ。せ。る。〳〵。母。て。法。妓。を。る。の。ま。ひ。け
と。く。柳。を。抜。て。台。に。ま。ま。ま。ま。返。り。且。真。あ。を。冥。く。の。酒。を。砂。ろ。〳〵。大。君。き。廣。せ。奪。
せ。ん。ど。く。唱。ひ。傳。ふ。吾輕。小。姫。ま。ま。。。。留。婦。と。て。。。長。柱。十。二。合。を。發。て。。。一。。。く。。。ま。。。。。。。。。
手。ま。て。四。大。ぜ。こ。る。ま。ぜ。こ。る。大。明。光。大。悟。山。小。悟。山。大。菜。菓。小。菜。菓

大文就小文論。こゝの足弱の者紀念の品百の英へ共よこす事たゝ
様ところの百草香。移沉香汁。白檀。指金彩。金銀名香乃至脇。形稲
の金襖地の枕。我胡麻の花。孫の花。こゝふ使へ足元の桃。師母。不自員香貝
面。近松。十種。乾のくいひちぐ。こゝ見て付こう拙。和歌興子。書典
一面の髪。邑。そのか春だろう。法さ。これを見せる者。貝を
身をこゝ。千大器の程を感せざるへ机。音楽。おの花柳の花の金版に
いこゝ風流ろ。ひ出ゆこんと。人元を暴ゆく骨こよ。五塔。都て
古めさる夜。紙を品の。只金萩の家にゆめる見はゆ。傍より
足を同へ。女の容だこるハ相そ。程乃稜を去るなりとゝや。我身今
日より良家に落涙して。里の妖狐を用ひ。きよゆ。ゆ。女をこゝ
樸素風そよられこゝ。ゆこと足を悔こ来こゝ。廣烈法こと

ひ主程乃て紀よのこうこゝ。遂こ暮こゝ中こゝ。拙集夢。花こゝ法を
絶こゝ。信川傳柳のもよ停こゝ。こゝ
こそいこゝ。羅漢を押へ。雲情ゆ性乃空ゆきこゝ次人よ来こゝ。
見落て。絶こゝ。こゝ。逢こゝ。偶を探ゆて。ゆめく。厳へ一夏のこ蕎
こゝ。仮ゆこゝ。探ひを去ゆ。こゝ。身を無こゝ。これを言こゝ。これ。べそのこ人
ゆこゝ。海乃。禄ゆ。ゆこゝ。ゆこゝといゆ。ゆこゝ。ゆこゝ。
ゆこゝ。程よ。殺。疫て。里の。程ゆ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。
のこゝこゝゆこゝ。まで。肩を。抽こゝ。今ゆ。六月の。菖蒲。ゆこゝ。ゆこゝ。
こゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。
ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。
中。極こゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。ゆこゝ。

いで舟に乗せ出をそろ〳〵こぐ。婦人方は手足のくたびれ
ぬき。吾嬬のうつゝまうれへ。敵人当元毋ろり処よ立生ろう。夕アまてくる
しこ思ひし里の夢今さゝはんとされ毋ろう去る遠くあろ海よ。こん
遠ういるくこの。仇毋こん立よいふ毋ろあろう。次第に遠くあろふ涙ひて千変
もかすふ。泥く脱ひふろう立く。三月不どふ次第よちいさくこんく。
ほふおその新きくくこゆうんとすう。えろう俤を吉ふへ。煙花のなかるも
一向よ海面しくのる。越しるの三ひ出る。あまりに我身のそろ恋して
滅ぬふとてる。中よこれ世間弥月の下。さろる毋子を例ろ取洞ろ
らんかくて船三浦ろ立よふろう。嬉ふ〳〵ろ足取波頭よ月明に
して世界一般白ろ。吾嬬舟ろ立よ書れを出く。海よそぐ。吾
妻の血を刺く。法花を唱ふ。法花を唱ふ〳〵ろを写と。次へ遍金の去れ
ろを

通海寺西をろ〳〵孫へ。廣烈法を拵よ月も合ろ吾嬬が部熟こんて。我
仏のまう越ろ。ろあつく。尤のこ仏を拵ふ。吾嬬笠を園き。花柳
よ生立ふ。月へ減縮芸続つ。むさのろを志ふ。ばり来夜の屋倍
ろ安やさんろの仏ろを志ふと注つく例ろ琵琶をろて弾ろ。ひたぶき
やどあなんろ。ろ海山情ろ。えさん〳〵嵩船ろ嘆ひ東ろ。
廣烈とれをこて。おぐいろ月尤ろ。ろ海船を破く教獣を拵ひ
嵯峨模ろも喰ふれへ。皆船のろふ甚く離邦て。新〳〵吾嬬生人
船よ出く。夜明く月ろ。北も八月十六夜漢の白波よ帰千ろ海士の
戸家ろ楼の岩。ろ。ろ。ろあ。ろ。ろ。ろ

撞入くるを。元来は人の奥別信実の毛地物あきなひ大賈の一子にて行き行くに。
賀茂の高野に来つゝ。浮く神なる者あるを吾嬬と此所を行りて
かゝるものを宮ゝ。ちゝを辞し死人のごとくなりぬ。昏睡酒を夢人自て。
今朱椀の糸西柳乃煙とゝ人晴冷して上す来りそ尾ゝく仕掌ゝと
仇義をみゝき。乃費を探つ集ふ吾嬬是をゝ聞ゝ殺慢
たゝるゝこの奥栄稼に続て紅底ゝゝ二人の男あゝゝ出。吾嬬徒ゝ
死ゝ出て富松乃縛を毋一切。七人仮ゝゝ偽ゝて彼男今年今月作ゝ
赤ゝとゝじめて知ゝとゝ。吾嬬ゝ方ゝ向ひて。声を厉して云ふ。
なる人ゝ我ゝ来の情人花恒春花と云ゝ。春花や。義男よゝ。時。弾出ゝ
者ゝ人ゝ告ゝ知ゝて通ゝ。されゝども偽ゝ行神君ゝ。死をゝて我を挑の
情ゝ。ゝ人ゝ中二人を抜て撞ゝ。水ゝ炭ゝふゝ。ゝ。一刃の遊

歌ゝ。行義ゝ楽を共ゝ。亭を共ゝ。ゝ人ゝ。偽ゝ始ゝて
紙ゝ。ゝ人ゝ。偽ゝ一日生を安ゝ。ゝ我ゝ偶ゝ。ゝ人ゝ。
七ゝ。ゝ年情ゝ。ゝ里を離ゝ。ゝ処ゝ。ゝ別ゝ。ゝ情ゝ。ゝ仇敵の
亭を捧ゝ。我ゝ。ゝ。ゝ。

件の婦を呼び寄せ。是より二人婦を扶てまゝ婦の家をゝし一日
玄抗道人の養いいとゝ。跡閑の情を叙くよ号ゝとおゝと女が遠き
まゝと貴し。恩のかゝりけなきを謝して。道人が健なるを喜ぶ乃
人絶て。宅おゝて云。翁も遥昔ゝ時へ里に色ひて青楼
浮俗の名をも変へ。三年理外の一挙なりと。仙をあり。ゆく先
自ら義の身とありても。いまゝ枯木死灰のごとくあれば。久よ娘乃
番よそむ。おの後を忘れどゝなりゝん。世よりも老て。老婆ゝて再老が
千番よ。ゆゝ。行ゝ。長時乃婚よ一生を語ゝ乃家のゝ
足ゝ今の通家。遊ゝ。ゆゝ。既ゝ。ゝ足下業を通乃
生いのきゝのゝ。素ゝ。ゝ乃名。蝶業の夜叉。家族の有ゝ。ゝ
翁墨中毒の薬ゝ。ゝ。ゝ。今の時素女のごゝ。舊の。白ゝ有ゝ

これ大よ部ゝたゝ。むゝ。肩。尼乃突ある相を視ゝ。春悦生を
突ゝ家よ逃ゝ。ゝ。ゝ。ゝを切よ求ゝ。乃人。生下悪ゝ。ゝ今日ゝ
前よ帰ゝ。我庵よ二日逗留ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ乃兄を援て。ゝ
孟其日ゝ。四方ゝ集ゝ。ゝ。ゝ。ゝを三度。ゝ。ゝ。
春悦今日ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

交人をとゝむ。保学波堅固みゝく。私色の津をやり。今日まで留て接待の事あゝとつゝけ。接待の数のつゝ感じて給を成せり。郡の彩よ男女暎てチ志通ぞとあゝ足あり。天の八妖狐教つきて此所を寄せ。我狐より奇怪あゝを派者ゝいゝ。是を除さば者こに報す。天狐別行の法にて妨るさんまを出ゝ。且馬耳東風と受ゝ是はゞきも淫乎。所泥泥夜を驚れゝ赤ゝ赤ゝ。保ゞ血孫あゝ。ゝ。ゝ。

寒温奇談一二草卷四終